空作りのまち

一平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空作りのまち

【Ｎコード】
Ｎ７７０６Ｎ

【作者名】
一平

【あらすじ】
突然現れた空のひび。
一人の少女が空の秘密に迫ります。

空作りのまち

久々の快晴の日、少し湿った原っぱにちょこんと座って、クリィは空を見上げていました。
砂時計のような美しい曲線が、上に広がりながら空を紡ぎ出していました。

クリィは空作りのまちの女の子です。
ここでは、空のもとと空の草を混ぜて、薄く延ばして空を作っています。
空のもとはとても軽くてそのままでは飛んでいってしまうので、空の草を混ぜてちょうどよい重さにするのだと、クリィは学校で教わりました。
空のもとは真っ白なのですが、空の草と混ぜると鮮やかな青色になります。
クリィはこのできたての青色が大好きでした。

でも、今日の空は何かがおかしいと、クリィは気づきました。
遠くの空に、小さなひびがあるような気がしました。
そこだけ色が薄いようにも見えます。
クリィはその場所から目が離せません。
でも空はどんどん離れていくので、しばらくすると見えなくなってしまいました。

「また空を見てるの？」

後ろから声がしました。
振り返ると、クリィのお母さんがいました。

「あなたは本当に空が好きねえ」

とお母さんが言いました。

クリィは、空のひびのことをお母さんに話そうと思いました。

「お母さん、空、割れちゃうよ」

お母さんは笑って言いました。

「お母さんはあなたの倍以上生きてますけどね。空が割れるのなんて見たことも聞いたこともないわよ」

クリィは合点がいきません。

でも、何度話してもお母さんは笑うばかりでした。

「あら！　飛行船が来たわよ」

お母さんがこう言ったので、クリィは空の話をやめなければなりませんでした。

飛行船と空のひび

飛行船は、週に一度、空のもとをたくさん積んでやって来ます。飛行船は空のもとの浮力で飛んでいるのですが、たくさん積むときには浮かび過ぎないように大きなおもりを吊るしています。おもりのほとんどは肥料で、これで野菜や穀物や、空の草を育てるのです。

飛行船から、体におもりを付けた男たちが降りてきました。みんな抱えるようにして空のもとを持っています。これを工場の隣にある倉庫に運んでいきます。倉庫の上では、まちの男たちが、入ってくる空のもとの量を見て、屋根のおもりを追加しています。こうしてうまく重さを調節しないと、屋根が飛んだり潰れたりするのです。

飛行船の男たちの中に、クリィと仲のよいおじさんがいました。クリィはこのおじさんを見つけて駈けて行き、

「おじさん！　今日の空、割れそうだと思わない？」

と聞いてみました。

おじさんは、クリィを見つけてうれしそうな顔をしていましたが、それを聞いて急に真面目な顔つきになりました。

「割れるって？　何でそう思うんだい？」

おじさんが信じている様子なので、クリィは張り切って事情を説明しました。

おじさんは、立派な口ひげをなでながら静かに聞いていましたが、聞き終わると、

「そうかい……こりゃあ久しぶりにソラじいさんの出番かも知れねえな」

と言いました。

クリィはびっくりしました。

ソラじいさんなんて聞いたこともなかったし、おじいさん一人で割れそうな空をどうにかできるとは思えなかったからです。

「ソラじいさんって誰？　空をどうするの？」

クリィは興味津々で、目を輝かせながら矢継ぎ早に質問しました。

おじさんは仕事の途中で、クリィとしゃべってばかりもいられないので、困った顔をしました。

「クリィちゃん、仕事が終わるまで待ってくれねえか。後でゆっくり教えてやるよ。空のひびのこともな」

クリィは大人しく言われたとおりにすることにしました。

飛行船と倉庫を行ったり来たりする男の人たちを飽きずに眺めていました。

なんだか餌を運ぶアリを見ているようでした。

　仕事が終わったと見るや、クリィは飛行船の方に駈けて行きました。

飛行船の入り口では、汗だくの男たちがしゃべりながらビールを飲んでいました。

空のもとは軽くても、飛ばされないためのおもりが重いので、倉庫

から飛行船に戻るときに汗をかいてしまうのです。

クリィは、おじさんにぶつからんばかりの勢いで駆けつけました。

「おじさん！　ソラじいさんのこと、教えて！」

おじさんは、クリィの勢いを面白がるように微笑みながら迎えてくれました。

「おうおう。教えてやるとも。昔々、おじさんが生まれるよりももっと昔の話だ」

おじさんは話し始めました。

昔は空のもとには空の草ではなくて、雑草や、場合によっては生ごみなどを混ぜていたこと。

その頃は空にひびが入ることもあって、空塗りと呼ばれる人たちが飛んでいって空のもとでひびを埋めていたこと。

空の草を混ぜて空を作るときれいで丈夫な空ができることに、ソラじいさんが初めて気づいたこと。

ソラじいさんの本当の名前はワットだけど、今の綺麗な空を作る基になったことを称えて、みんなソラじいさんと呼んでいること。

クリィは初めて聞く話ばかりで、ぽかんと口を開けながら聞き入っていました。

話がおわってもぽかんとしているクリィを見て、おじさんがあごをつかんで口を閉じると、周りの男たちが笑いました。

クリィはハッとして、少し顔を赤らめながら言いました。

「ソラじいさんってどこに住んでるの？　私、会ってみたい」

おじさんは、少し考えるようなしぐさをしながら、

「この子は本当に空が好きだなあ」
と、独り言のように言いました。
「うむ。それじゃあ……クリィちゃん。お母さんを呼んできてくれるかい。ソラじいさんのところはちょっと遠くてなあ。飛行船でないと行けないんだ」
クリィは少し不安になりました。
飛行船は週に一度しかこのまちに来ません。
つまり、飛行船で出かけると、来週まで帰って来られないのです。
クリィはそれでももちろん行きたいと思いましたが、お母さんが許してくれるでしょうか。
クリィは、どきどきしながらお母さんを連れてきました。
「クルトさん。この子を飛行船に乗せてやりたいんだ」
おじさんは単刀直入に切り出しました。
お母さんは難しい顔をしています。
クリィは顔色を伺いながらそわそわしていました。
「この子は空が大好きだ。空ってものをちゃあんと見せてやりてえ。昔のあんたのときみたいにね。」
最後の言葉に、クリィのお母さんは眉をピクッと動かしました。
クリィは、お母さんが飛行船に乗ったことがあると知ってびっくりしました。
クリィのお母さんは、クリィのほうに向き直って、

「クリィ。あなた、あの飛行船に乗ってみたいのね」
と、静かに言いました。
クリィは、おっかなびっくり小さな声で、
「うん」
とだけ言いました。
お母さんは、
「絶対に、来週帰ってくるのよ。絶対に」
とクリィに言いつけました。
クリィは、許しが出たと分かってうれしくなってお母さんに抱きつきました。
おじさんは、
「何ならあんたも乗ってくかい？」
と言って笑いました。
クリィのお母さんは、
「私には仕事がありますから。それより、この子がちゃんと来週帰って来るように、お願いしますよ」
と念を押すように言いました。
おじさんは、笑顔で答えました。
「大丈夫さ！　このまちが世界で一番空が綺麗な場所だ！　あんたもよく知ってることじゃないか」

ソラじいさん

飛行船は、このまちに来るときは低く飛び、まちを出るときは高く飛びます。
空気の流れに乗るためです。
上空では空気は空の流れと同じ向きに流れ、地表近くではその逆に流れています。
普段遠くから眺めている空を近くで見られて、クリィは幸せでした。
飛行船の中は思いのほか小奇麗で、窓辺に空の草が植えてあるのも素敵だと思いました。
クリィは空を眺めたりおじさんに話を聞いたりして過ごしました。

「おじさん。何で昔は空に生ごみなんか入れたの？」

「生ものを空に混ぜて流すと肥料になるのさ。時間をかけて流れる間にね。今使っている肥料も、ほとんどは空集めのまちで空から取った空の草だしなあ」

「空が割れるとどうなっちゃうの？」

「さあてねえ……そればっかりは俺も知らねえなあ。ソラじいさんに聞いてみるといい」

次の日にはソラじいさんのいるまちに着きました。
男たちは、旗を振って着地するサインを出していました。
飛行船は、地上からの助けがないと着陸が難しいのです。
飛行船からたらした錨を地上に固定し、その後錨を巻き戻すことで地上に降ります。
錨を巻く作業は男たちが力を合わせて行うので、みんなはまた汗を

かきました。

クリィは、生まれて初めて違うまちの土を踏みました。
ここは大きな穀倉地帯で、まちの周りには広大な麦畑がありました。
ちょうど収穫前で金色になった一面の麦が風になびくのに、クリィは見とれていました。

そのとき、クリィは麦畑の上をゆっくり降りている白いものに気がつきました。

「あれがソラじいさんだよ。今もあんなことやってんだなあ」

とおじさんが言いました。
ソラじいさんは、空のもとに身を包んで飛んでいたのでした。
クリィが見ていると、ソラじいさんはゆっくりとまちの方に近づいてきました。
ソラじいさんはポンプのようなものを持っていて、それをうまく使って移動しているのでした。
近づくにつれて、そのシュコ、シュコというゆっくりした音が、クリィの耳にも聞こえてきました。
ソラじいさんは、クリィとおじさんのところまで来ると、ポンプを逆向きに噴射してうまく止まりました。
ソラじいさんは真っ白い立派なひげをたくわえて真っ白い空のもとの中にいるので、目と鼻だけが目立っていました。
ソラじいさんはおじさんの顔を見ると、ニカッと笑いました。

「よう！　飛行船の坊主か！」

「おいおい。俺はいつまで坊主なんだい？」

おじさんも笑って答えました。

「じいさん。その格好をしてるってことは、まさかまた空塗りを始めたのかい？」

「その通りじゃ！　空のひびなど久しぶりに見たわい」

「おじいさん、空のひび直したの？」

クリィが尋ねました。

ソラじいさんは、初めて気がついたようにまじまじとクリィを見つめました。

「はて。こんな子がこのまちにおったかな」

「その子、空作りのまちから来たんだ。ソラじいさんに会いたいって言ってな」

おじさんの言葉に、ソラじいさんはうれしそうな顔をしました。

「そうかい。わしに会いたがる客など何年ぶりか分からん。お嬢さん、ゆっくりしていきなさい」

　おじさんは穀物や肥料を運ぶ仕事があるのでそこで別れ、クリィはソラじいさんの家にお邪魔することにしました。

ふわふわと飛ぶソラじいさんについていく間、クリィは自己紹介したり、空作りのまちから空のひびが見えたことを話したりしました。

家に入ると、ソラじいさんは体にまとった空のもとを丁寧に取り、皮袋につめてたんすの中に片付けました。

クリィは、ソラじいさんが自分とほとんど同じ背格好なのでびっく

りしました。
空のもとをまとって、かなり大きく見えていたのです。
じいさんの立派なひげと白髪は、顔に空のもとがまだ残っているみたいに見えました。

「さてさて。お嬢さん。あんたは空のひびを昨日見つけたと言ったね。それも空作りのまちで。不思議なもんじゃ……空がおかしいとき、最初に気づくのはいつも子供じゃ」

クリィはソラじいさんにいろいろな事を聞きました。
空塗りの方法。空の草を使うようになる前の空の色。どうして空にひびが入るのか。
ソラじいさんは丁寧に答えてくれました。
空塗りのとき、空のもとと空の草を口の中で混ぜるのだとじいさんが言うと、クリィは目を丸くしました。
昔は空の色はいろんな色が混ざってあまり綺麗なものではなかったと聞くと、クリィはいろんな色があるのも面白そうだと思いました。
空のひびの原因については、じいさんは曖昧な返事をしました。

「空の向こうにもいろんなもんがあるんじゃ。しかしわしらは空の中でしか生活できんからのう……お嬢さん。世の中には知らんでいいこともあるんじゃよ」

クリィは、ソラじいさんの言っていることが分かりかねて、怪訝な顔をしました。おじいさんはそれを見て、

「とにかく、空のひびは塞がなきゃならん。一回割れちまったら取り返しがつかんからのう。お嬢さんだって、綺麗な空がなくなってしまうのは嫌じゃろ？」

クリィは、空の向こうを見てみたいような、空に傷を付けたくないような、複雑な気持ちでうなずきました。
ソラじいさんは笑って言いました。

「わしもお嬢さんも、空が大好きな仲間じゃ。このまちでは青い空よりも金色の麦のほうが好きだと言うものが多くてね。誰も空のひびなど気づかんのじゃ。今度会うときはお嬢さんには空塗りのやり方を教えてやろう」

クリィは、空のもとをまとって宙を舞い、空のひびを綺麗に埋める自分の姿を想像しました。
大好きな空のための仕事です。
クリィはとても素敵だと思いました。

空色の髪留め

もうすぐ飛行船が出発する時間でした。
クリィはソラじいさんともっと話したかったのですが、おじさんが飛行船に乗るように言うのでしぶしぶ着いて行きました。
ソラじいさんが飛行船まで見送ってくれました。

「次は二日かけて空集めのまちに行くんだ」

おじさんが言いました。
クリィはまだ空塗りの自分を想像していて、上の空でした。

「クリィちゃん。君のお母さんが生まれたまちだよ」

クリィは突然妄想の空から引き戻されました。

「お母さんってずっと空作りのまちにいるんじゃないの？」

「そうとも。昔、空が見たいからって言って空集めのまちから飛行船に乗ってきたんだ。クリィちゃんが生まれる少し前のことだから、もしかしたらクリィちゃんはそのときもうお母さんのお腹の中にいたかもな。空作りのまちに着くとすぐに家を決めちまってね。それ以来ずっとあそこに住んでるのさ。よっぽどあのまちが気に入ったんだろう」

クリィは、そんな話お母さんから聞いたことがありませんでした。
少し考えて、クリィは尋ねました。

「じゃあ空集めのまちに私のおじいちゃんやおばあちゃんがいるの

？　お父さんも？」

「ああ、そりゃあ……どうだろうなあ。君のお母さんは俺には何にも教えてくれなかったからなあ」

おじさんが知らないと言うので、クリィはがっかりしました。
いくらお母さんの生まれたまちでも、お母さんを知っている人と会わなければ意味がありません。
クリィは空集めのまちにいるであろうおじいちゃんとおばあちゃんに思いを馳せました。
お母さんがいつまでたっても帰ってこないので、寂しがっているに違いありません。
クリィは、今度はお母さんと一緒に飛行船に乗りたいと思いました。

それからの旅路はクリィにとっては退屈でした。
移動するにつれて空の色は薄くなっていきます。
空の色は、時間がたつと消えていくのです。
クリィは空作りのまちで見る空のほうが好きでした。

おじさんが見かねてちょっとした遊びを持ってきました。
飛行船の中にある空のもとを少しとってきて、窓辺の空の草の葉っぱと一緒に口の中に放り込みました。
びっくりして目を見張っているクリィの前でしばらくもごもごとひげを動かした後、おじさんが口を開くと、鮮やかな青色になった空のもとがゆっくり出てきました。
クリィは空作りのまちで見るような美しい青に目を輝かせました。

「おじさん！　それ私もやってみたい！」

おじさんは元気を取り戻したクリィを見てほっとしながら、あめ玉

大の空のもとと、空の草のかけらを差し出しました。
おじさんは自分の歯を見せながら、口の中が青くなるから終わったらすぐに歯を磨くように言いました。

クリィはすぐに空のもとと空の草を口に入れました。
空のもとは当然食べ物ではありませんし、空の草は薬に使うことはあってもそのまま食べるものではありません。
クリィは初め、空の草が苦いのに驚きました。
一方空のもとは、ほとんど味はありませんがかすかに甘みがあります。
クリィは器用に舌を使って空の草を空のもとの中に入れ、しばらく噛んでみました。
完全に二つが混ざると、はっかのような爽やかな味と苦味の混じった不思議な味になりました。
クリィはなんだか切ない気分になりました。
もともと空の草は興奮を鎮める薬によく使われるもので、クリィはこの味の効果を早速受けたのでした。
それでも、これが空の味だと思うと、クリィはちょっとうれしくなりました。

クリィは口の中で作った空のあめ玉を眺めました。
まるで宝石のようだと思いました。
空の草が混ざったことで、空のもとは浮かび上がることなく手に収まっていました。
ソラじいさんがこれで空のひびを埋めることを思い出して、その玉を伸ばしたりこねたりしてみました。
クリィは空の玉を輪にして、自分の髪を後ろで束ねてみました。
空を身に付けていると思うとうれしくて、すぐにおじさんに見せに行きました。

「可愛いじゃねえか。しばらくそうやって付けてるといい。空の草を混ぜた空のもとは逃げて行きはしねえからな」

言いながらおじさんはクリィに歯ブラシを手渡しました。
クリィは得意になって、歯を磨く間ずっと鏡でこの新しい髪留めを見ていました。

空集めのまち

空集めのまちに近づく頃には空はほとんど白に近い色になっていました。雲もないのに空が白いのは、クリィにとって初めての光景でした。クリィは空の草や自分の髪留めを見て、故郷の空作りのまちを思い出していました。空の色だけで、このあたりには住みたくないな、と思っていました。

「クリィちゃん！　あれだ。空集めの工場だ」

おじさんがクリィを呼びました。
窓から外を覗くと、遠くに見覚えのある曲線が見えました。
空作りのまちで空が始まるときと同じように、砂時計のような美しい曲線に沿って空が終わっているのでした。
クリィは、空作りのまちの活動を逆再生しているようなこの光景を興味深く見守っていました。
空作りのまちでは、空のもとは倉庫に溜められ、工場で空の草と混ぜられて、ろうとのようなチューブに沿って上に押し出されます。
空集めのまちでは全てが逆でした。
ここでは、チューブに沿って空が集められ、工場を通って出てきた空のもとが倉庫に溜められます。

「おじさん。あの工場では何をしてるの？」

「あそこでは空から肥料を漉し取っているのさ。できた肥料も空のもとも、飛行船に乗せて運ぶんだ」

クリィは生まれて初めてこの循環を考えました。
空作りのまちで使う空のもとは、何度も何度も同じ道を通っている

のです。
空の草にしたってそうです。
空の草が空を通って肥料になり、新たに空の草を育てるのですから。
クリィはなんだか不思議な気分になりました。

ソラじいさんのいたまちでやったのと同じように、旗を振り、みんなで力を合わせて飛行船を降ろしました。
外に出ると、クリィはここの空気が他のまちとは違うことに気づきました。
なんだか生暖かく、良い匂いがしません。
空作りのまちの爽やかな空の草の匂いとも、ソラじいさんのまちの美しい麦の匂いとも違います。
クリィは、このまちにはほとんど草木がないことに気づきました。
飛行船からは、空集めの工場ばかり見ていて気づかなかったのでした。

「ここに住んでるのは金持ちばっかりなんだ」

おじさんが言いました。
クリィは、お金をもらってもこんなまちには住みたくないと思いました。
空も綺麗じゃないし、空気も良くありません。
お金持ちがなんでこんなところに住んでいるのか、クリィには理解できませんでした。

「どうしてお金持ちがたくさんいるの？」

クリィはおじさんに聞いてみました。

「ここでは肥料を作ってるだろう？　昔はその肥料を高い値段で売

ってたのさ。それで貯めた金で薬だの機械だのを作って、また高い値段で売ってるんだ」

クリィはそれを聞いて憤慨しました。

だって空の草の肥料はこのまちの人が作ったものではありません。空が作ったものです。

それをここの人たちが高値で売っていたと知って、クリィはますますこのまちが嫌いになりました。

「私このまち嫌い」

「まあそう言うな。俺たちが乗ってきた飛行船だって、空作りのまちの工場で使ってる機械だってこのまちで作ったもんだ。このまちのおかげで、クリィちゃんだってソラじいさんに会えたわけだ」

クリィは納得がいきませんでしたが、もう文句は言いませんでした。

おじさんたちは荷物の積み替えの仕事があり、まちの人たちがクリィたちが乗ってきた飛行船の点検を始めたので、クリィは辺りをぶらぶらすることにしました。

地面は土でしたがカチカチに踏み固められていて、草木も人や馬車が通るときに邪魔にならない場所に申し訳程度に植えられているだけでした。

クリィは、草木の多い場所を探して、公園を見つけました。

多いとは言え周りに植えられているだけで、公園の真ん中は大きな広場になっていました。

クリィは、公園の草や木を観察して、不思議に思いました。

肥料がたくさん取れるまちなのに、ここの草木には元気がないように見えたからです。

「その髪留め、きれいだね！」

不意に後ろから話しかけられて、クリィはびっくりしました。
見ると、クリィと同じくらいの歳の子供が四人いました。
クリィは、自分の髪留めが褒められていることに気づいて、お礼を言いました。

「ありがとう！　これ、空のもとで作ったの！」

どんなに住む場所が違っても、子供は子供です。
クリィとまちの子供たちはすぐに仲良くなりました。
まちの子供たちは、空作りのまちでは、空がクリィの髪留めと同じくらい美しいと聞いて羨ましがりました。
クリィのほうは、子供たちが持っている珍しい遊び道具に心を惹かれました。
全く違う環境で育った子供たちの間で、話題は絶えませんでした。
クリィがこのまちは空が真っ白だと嘯くと、子供たちの一人が

「もっと青い日だってあるんだよ！　今日は特別白いんだ！」

と言いました。
空作りのまちで作られる雲はいつだって同じ鮮やかな青色です。
それなのに空集めのまちでは日によって色が違うと聞いて、クリィは不思議に思いました。
まちの子供たちの道具を使って遊ぶと、要領を得ないクリィが大負けし、道具を使わない鬼ごっこをやると、すばしっこいクリィは負け知らずでした。
まちの子供たちは、鬼ごっこでするすると木に登るクリィに舌を巻きました。

「クリィちゃん！　そろそろ行くぞお！」

遠くからおじさんの声が聞こえました。

クリィは、子供たちみんなと握手して別れました。

牧場とネズミ

その日は飛行船ではなく、そのまちの宿に泊まりました。
宿の備品はみんなピカピカで、料理もぜいたくだったので、クリィはさすがお金持ちのまちだと思いました。
次の日は出発が早いからと言われて、すぐに寝かされました。
クリィはふかふかのベッドに横たわり、
疲れていたのですぐに眠ってしまいました。

空集めのまちからの行程は低く飛ぶことになります。
ここはちょうど空作りのまちの反対側で、空気の流れが切り替わる場所なのです。
飛び立ってしばらくは、空集めのまちの人々がよく見えました。
クリィは、公園に四人の子供が集まっているのを見つけて、おじさんに言いました。

「私、今度またこのまちに来たい」

事情を知らないおじさんは、値の張る宿に泊まった甲斐があったと思って笑いました。

飛行船は海の近くを飛び、山の近くを飛びました。
クリィは、白い空には興味が持てなかったので、下ばかり見ていました。
クリィはときどき見える野生の動物に目を奪われていました。
空作りのまちの周りでは、ほとんどの土地に空の草が植えられていて、動物が寄り付きません。
空の草は苦くて、たくさん食べると気分も沈むので、食べる動物が

いないのです。
だからクリィは、今までほとんど食肉の形でしか動物を見てきませんでした。
夢中で動物を探すクリィにおじさんが、次は牧場に寄るからそこでゆっくり見られると言うと、クリィは大喜びしました。

牧場ではおじさんたちは穀物を運び出し、肉や牛乳を運び込んでいました。
クリィは、おじさんたちがどこに行っても同じような仕事ばかりなので、なんだかおかしくなりました。
空が綺麗でも、麦が綺麗でも、動物がたくさんいても、目もくれずひたすら荷物を運んでいるのです。
おじさんがクリィを牧場主に紹介してくれていたので、クリィは牧場主の案内で牛や馬や鶏を見たり触ったりしました。
クリィは生きている鶏を見るのが初めてで、追いかけ回して遊んだり羽を拾ったりしました。

「そうだ。最近うちに来た可愛いのがいるんだ。ちょっとおいで」

クリィの喜びしきりの姿を見て上機嫌な牧場主は、牧場の隅にある小屋にクリィを案内しました。
そこは、生まれたばかりの動物や、弱っている動物を雨風から守るための小屋でした。
小屋の中は、一面緑の牧場とは対照的に、一面に藁が敷き詰めてありました。

「さて……どこに行ったかな」

牧場主は、着ているチョッキのたくさんのポケットを探り始めました。

クリィは、牧場主の探し物を待ちながら、窓から外を眺めていました。
空の色は、空集めのまちにいた頃より少し青みを増していました。
と突然、クリィの足に小さな動物が飛び掛ってきました。

「わっ……わあーー！！」

クリィがびっくりしている間に、その動物はクリィの肩の上にまで上り、クリィの髪にしがみつきました。
クリィは引き剥がそうとしましたが、自分の髪を一緒に引っ張ってしまい、痛くてうまくいきません。
牧場主がなんとかこれを引っぺがしました。

「ごめんごめん。こいつ、今まで人に飛び掛ったことなんてなかったんだけど」

それは、小さなネズミでした。
背は茶色ですが、腹と耳の内側は薄い黄色でした。
クリィは、自分の手のひらに収まるほど小さな生き物はほとんど知らなかったので、驚きをこめてその生き物を見つめました。

「こいつは空の草を食べるネズミなんだ。珍しいだろう？　空の草なんて誰も食べたがらないのに……何日か前に牧場の近くで寝ているのを見つけてね、あまり可愛いから連れて返ってきたんだ」

言いながら牧場主は、ようやくポケットから出てきたくしゃくしゃの空の草の葉っぱをネズミに食べさせていました。
クリィは、この小さな生き物が必死に葉っぱを口に詰め込む姿をじっと見つめていました。
手を使って食べ物を口に押し込むしぐさがとても可愛いと思いまし

た。
牧場主は、クリィがこの自慢のネズミに夢中なのを見て、さらに上機嫌になりました。
「気に入ってもらえてうれしいよ。このネズミがもう一匹いたら君にも分けてあげるんだけどねえ」
牧場主は、興味津々で牧場を隅から隅まで見てくれたクリィに、記念にと言ってひよこを一羽分けてくれました。
クリィは、あのネズミに負けず劣らず可愛らしいこの小さな生き物がすぐに気に入り、牧場主に何度もお礼を言いました。
ひよこの育て方を熱心に教わっていると、荷物運びを終えたおじさんがやって来ました。
「クリィちゃん。そろそろ出発だぞ」
クリィは、ひよこの話を聞き終わるまで待ってくれるように頼みました。
こんなに熱心な聞き手を持つのは初めてだった牧場主は、話を続ける時間を稼ぐために、飛行船にチーズと牛乳をサービスしました。
「牧場主さん！　本当にありがとうございました！」
クリィは大きく手を振って牧場を後にしました。

一週間

「全く、大したもんさ！」

飛行船の中は、あの牧場主の話で持ちきりでした。
普段は取り引きには厳格なあの牧場主が、よく確かめもせずに商品をサービスするなんて、考えられないことでした。
みんなは、クリィが動物に夢中だった以上に、牧場主はクリィに夢中だったんだと言って笑いました。
クリィも、とんだ色女だとからかわれました。

「そんなに厳しい人なの？　ずっと優しかったよ」

クリィは不思議そうにおじさんに言いました。

「きっと子供が好きなんだろうさ」

とおじさんは答えました。
でもクリィは、それは違うと思いました。
きっと、子供が好きなのではなく、動物好きな人が好きなのです。
きっと、動物を荷物としてしか扱わない飛行船の男たちが好きではなかったのです。
クリィは、楽しそうに動物の話をする牧場主を思い出し、もらったひよこに牧場主と同じレークという名前をつけました。
少しずつ青くなっていく空を眺めながら、ソラじいさんの言葉を思い出しました。
「わしもお嬢さんも、空が大好きな仲間じゃ。このまちでは青い空よりも金色の麦のほうが好きだと言うものが多くてね。誰も空のひびなど気づかんのじゃ。」

クリィは、ソラじいさんと牧場主が、少し似ていると思いました。
　次は漁港に寄りましたが、夜中にちょっと寄港するだけだから、
という理由でクリィは外に出してもらえませんでした。
クリィは、レークのえさのために貝殻をいくつか拾ってくるようお
じさんに頼んで、寝ることにしました。
寝る前に髪留めを外して見てみると、少し色あせ始めているような
気がして、クリィは残念でした。
一箇所だけことのほか色あせている部分を見つけて、クリィは不審
に思いました。
しばらく考えた後、きっと牧場のネズミに青色を食べられたんだと
思って、なんとなく納得しました。
こね直すとその色あせも分からなくなったので、安心して眠りまし
た。

　クリィが目を覚ますと、飛行船の男たちはみんなで錨を巻き戻し
ていました。
今度はどこについたのかと思って外を見ると、空が鮮やかな青です。
クリィは帰って来たのです。
おじさんがクリィをびっくりさせるために、着陸してから起こそう
と思っていたのでした。

「なんだ、起きたのか！　待ってろ、もうすぐ着陸だから」

おじさんはクリィを横目に言いました。
クリィは、この飛行船の旅を振り返ってみました。
空のひびとソラじいさん。
白い空と子供たち。
小さなネズミとひよこのレーク。
これが全部たった一週間で起こったとはとても思えませんでした。

それほどこの旅はクリィにとって大きな経験でした。
クリィは窓から空を見上げました。
一週間で、この空も今まで以上に身近なものになったような気がしました。
飛行船が着陸すると、クリィは真っ先にお母さんのいる家に向かって駈けて行きました。

一週間（後書き）

一段落しましたが、まだ続きます。
ここがちょうど折り返し地点、の予定です。

未来の空塗り

飛行船でのあの旅から二月ほどたったある日、クリィはまた原っぱに座って空を眺めていました。
クリィは全天をくまなく眺め、ひびが入っていないことを確認しました。
あの一件以来、クリィはほとんど日課のように空を点検していました。
空に異常がないのを見ると安心しましたが、それでもソラじいさんとの約束を覚えていて、空塗りをする自分を想像することもありました。
空にひびが入るのを待っている気持ちもあったのです。
一度だけひびを見たような気がしましたが、後で飛行船のおじさんに聞いても知らないと言われました。

そんなクリィの目に、遠くから漂ってくる白い点が見えました。
それは本当に点にしか見えませんでしたが、クリィはすぐにソラじいさんが来たのだと思いました。
クリィは走って迎えに行きました。

「お嬢さんは本当に目が良いのう！」

息を切らせてやって来たクリィを見て、ソラじいさんは驚きの声を上げました。

「よくわしだと分かったね。さて。空作りのまちに来るのは久しぶりじゃ。ここは本当に空が綺麗じゃのう」

クリィは懐かしいシュコ、シュコという音を聞きながら、ソラじい

さんを家まで案内しました。
空中を移動するソラじいさんはすぐにまちの子供たちの注目を集め、クリィの家に着く頃にはちょっとした人だかりができていました。ソラじいさんは、自分がいつになく注目されているので、驚きつつも喜んでいました。

「こんなに注目されたのはここ十年で初めてじゃ」

クリィは、こんなにユニークなおじいさんが注目されないほうがおかしいと思いました。
野次馬の子供たちは、ソラじいさんと一緒にクリィの家に入ろうとしましたが、ソラじいさんが後でいくらでも遊んでやると保証して帰しました。

ソラじいさんは、家に入ると空のもとを脱いで大きく伸びをしました。

「丸一日この中におったからのう。疲れてしもうた」

「おじいさん、ここまでずっとそのポンプで来たの？」

クリィが驚いて聞くと、ソラじいさんは笑って答えました。

「まさか！　お嬢さんも風の流れは知っとるはずじゃ。地面の近くで風に身を任せておればいずれこのまちに着く。丸一日と言ったがほとんど寝ておったようなもんじゃ」

「そっか。じゃあおじいさん、わざわざこのまちまで何しに来たの？　丸一日もかけて来たんだから、何か理由があるんでしょ？」

ソラじいさんはニカッと笑いました。

「年寄りの道楽じゃよ！　たまには旅行も良いと思ってな。それにここには、未来の空塗りのお嬢さんもおるし」

クリィは密かに胸が高鳴るのを感じました。

「じゃあ本当に教えてくれるのね！」

「もちろん」

本当に空塗りを教えてもらえるのだと思うと、クリィは自然に笑顔になりました。

ソラじいさんも笑顔でした。

家に帰らずに窓から様子を伺っていた野次馬の子供たちは、何があったのか知ろうと窓に耳を押し付けました。

気がかり

ソラじいさんは、二、三週間空作りのまちに滞在してクリィに空塗りを教えるつもりだと言いました。
でもその前に、道具を準備したり空の草の味に慣れたりしなければなりませんし、何よりクリィのお母さんの許可も必要でした。
クリィは期待と不安ではち切れそうになりながらおじいさんの話を聞いていました。
ソラじいさんはクリィが一種の興奮状態にあるのを見て、腰につけた袋から空の草の葉っぱを取り出しました。

「空塗りへの第一歩じゃ。ちっとばかり興奮しとるようじゃしのう。少しかじってみなさい」

クリィは言われたとおりにしました。
すぐに落ち着いてきたので、ソラじいさんにお礼を言いました。
落ち着くと、クリィは飛行船の中で髪留めを作ったことを思い出し、ソラじいさんに話しました。
ソラじいさんは、空のもとと空の草をうまく口の中で混ぜるのは初めての者には難しいと言い、うまく空を作ったクリィを褒めました。

クリィは、これをきっかけにいろんなことを話し始めました。
空集めのまちでは日ごとに空の色が違うこと、牧場主のレークと風変わりなネズミのこと、いまや立派な鶏に成長したひよこのレークのこと、一週間旅に出ていたせいで学校で大変な苦労をしたこと。
ソラじいさんは静かに聞いていて、うなずいたり笑ったり、眉をしかめたりしました。
クリィが話し終わると、ソラじいさんは真剣な表情でクリィに尋ねました。

「その奇妙なネズミは一匹しかいなかったと言ったね？」
「うん。もう一匹いたら分けてあげるんだけどって、牧場主さんが言ってたから」
「そうかい。それならいいんじゃ」
クリィは一刻も早くソラじいさんのように宙を舞ってみたいと思いましたが、ソラじいさんはお母さんにちゃんと話してからでなければだめだと言いました。
クリィのお母さんは、クリィが危険なことに手を出そうとするといつも悲しそうな顔をしました。
クリィにとって、これは厳しく叱られるよりも効きました。
クリィは、飛行船での旅のことを何もかもお母さんに話していました。
ソラじいさんとの約束の話をしたときには、お母さんの目にわずかに悲しみの色が浮かんだような気がしました。
そのときには話に夢中でほとんど気にも留めなかったのですが、今となってはクリィの心はお母さんのその目に囚われていました。
お母さんが帰ってくるまでにはまだ時間があったので、二人はまちを散歩することにしました。
クリィはまず、庭先に出てレークにえさをやりました。
ソラじいさんは、レークの食べっぷりに感心して、
「こんなに食うんじゃあ卵でも貰わんと割に合わんなあ」
と真面目な顔で言いました。

ソラじいさんは、まちで会う子供たちみんなに体をつつかれたり体当たりをくらったりしました。
子供たちは、ソラじいさんが空を飛ぶ不思議な生き物ではなくてただのおじいさんなのを見ると、余計に不思議がりました。

「じいちゃん、どうやって飛ぶの？」

と子供に聞かれると、ソラじいさんは決まって、

「このひげを大きく膨らまして飛ぶんじゃ」

と言って笑いました。
子供たちはソラじいさんのひげを引っ張ったりくしゃくしゃにしたりしましたが、空飛ぶおじいさんの秘密はつかめませんでした。

ソラじいさんは前にも空作りのまちに来たことがありましたが、久しぶりに来ると変わっているものも多く、新しくできたものを見つけては喜び、なくなっているものに気づくとがっかりしました。
特にソラじいさんを驚かせたのは、空作りの工場のすぐ近くにある製紙工場でした。
空作りのまちでは、空を作るために大量の空の草を使います。
でも、空作りに使うのは空の草の葉っぱだけです。
茎や根は、葉っぱに比べて空作りに必要な成分が少なく、しかも硬くて空のもととうまく混じりあわないので、地面に埋めて捨てていました。
これではもったいないというので、十年ほど前に製紙が提案されたのでした。
ソラじいさんはこんな大きな建物を建てるお金がどこから来たのか不思議がりましたが、クリィはそんなことは知りませんでした。

「私のお母さんもここで働いてるのよ！」

クリィは自慢げに言いました。
この工場の紙は、空の草特有の爽やかな香りがするというので、空作りのまち周辺では評判でした。
クリィの学校でもこの工場の紙を使っていました。

一通りまちを見終わると二人はクリィの家に戻りました。
空を飛ぶ秘密を探ろうと粘り強く後をつけていた子供たちを満足させるために、ソラじいさんは空のもとをまとって外に出、子供たちと遊びました。

親の心、子の心

クリィのお母さんが帰ってきたとき、ソラじいさんは子供たちの相手に疲れて、家の中でうとうとしていました。

「お母さん！　おかえり！」

クリィの元気な声でハッとしたソラじいさんは、ぴょんと立ち上がってクリィのお母さんに挨拶しました。
お母さんは、ソラじいさんを見るのは初めてでしたが、クリィから立派な白ひげのおじいさんと聞いていたので、すぐに分かりました。

「ソラじいさんですね。こんなところまでよくいらっしゃいました。どうぞゆっくりしていって下さい」

お母さんはソラじいさんに泊まっていっても構わないと言いましたが、ソラじいさんはそこまでお世話になるわけにはいかないと言って断りました。
それでも、食事はクリィの家でとっていくことにしました。

　クリィは、なんとなくお母さんがソラじいさんの訪問を快く思っていない気がして、お母さんの一挙手一投足をこっそり観察していました。
お母さんはお母さんで、クリィのカリカリした態度でこの二人が何を考えているのか漠然と察知していました。
料理の支度でお母さんの姿が見えなくなったとき、ソラじいさんがこっそりクリィに尋ねました。

「ところで、あんたのお父さんはおらんのかい？」

「いないよ。ずーっと昔にいなくなったんだってお母さんが言ってた。私、一度もお父さんに会ったことないもの」

もう慣れっこになっているクリィは平然と答えましたが、ソラじいさんはもじもじしながら変なことを聞いてすまんと言って謝りました。

食事の間、ソラじいさんはクリィのお母さんの料理の腕前をしきりに褒めました。
お母さんが照れているのを見て、クリィも面白がって褒めました。
お母さんはしどろもどろになって顔を赤らめました。
終始なごやかな雰囲気でしたが、クリィもお母さんも、食事を終えるのを恐れていました。
クリィはお母さんを悲しませたくありませんでしたし、お母さんはクリィをがっかりさせたくありませんでした。
そんな二人をよそに、突然ソラじいさんが話し始めました。

「クルトさん。空塗りって仕事を知ってるかね？」

クリィのお母さんは、観念したように静かに深呼吸をひとつして、答えました。

「ええ、この子から聞きましたわ」

「空塗りはいい仕事じゃ。空のてっぺんまで上って、自分も空の一部になったような気分になれる」

お母さんは、伏し目がちになって力なく微笑みながら聞いていました。

「このお嬢さんは空が大好きじゃ。あんたさえよければ空塗りを教えてやりたいんだが、どうかね？」

お母さんは、ソラじいさんの顔を見、クリィの顔を見ました。
クリィは、お母さんの悲しそうな顔を見て、空塗りなんかやらないと言ってしまおうかと思いました。

「安心しなされ！　空塗りをして怪我をしたり命を落としたりした者は一人もおらん。空に上るのは危険に思えるかも知れんが、お嬢さんの体には傷ひとつつかんわい」

ソラじいさんは、クリィの身を案じている様子のお母さんを見て付け加えました。
お母さんは、決心したように口を開きました。

「お返事は、明日……この子の口からお聞かせします」

ソラじいさんは、クリィが返事をするのなら断られることはあるまいと思って、クリィに笑いかけました。
でも、クリィはお母さんの表情に気を取られていてこれに気づきませんでした。

空作りの工場に知り合いがいるはずだからと言って、ソラじいさんはクリィの家を後にしました。
空のもとが入った皮袋は、一晩ここに置かせてくれと言って置いて行きました。
ソラじいさんがいなくなると、お母さんは静かにクリィに話し始めました。

「クリィ……お母さん、あなたに謝らなきゃいけないことがあるの」
クリィは、お母さんが何を言い出すのか、どきどきしながら見守りました。
「あなたが空が割れちゃうって言ったとき、お母さん笑ったでしょう？　そんなの見たことも聞いたこともないって」
クリィは、ソラじいさんと直接関わりのない話が始まったので意外に思いました。
でも、お母さんの顔が真剣だったので、クリィも真剣に聞きました。
「本当は、空のひびのことも空塗りのことも知ってたの。ただ……クリィにはあんまり空に興味を持たないでいて欲しかったの」
お母さんは、今まで話さずにいたいろんなことをクリィに話しました。

フラッシュバック

クリィのお母さんは、空集めのまちで生まれ育ち、そこである男の人と結婚しました。
男の人はハリィという名前の研究者で、空を集めてできる肥料を、地上で作る方法を模索していました。
ある日、ハリィは空集めの工場でできた肥料に、動物の毛のようなものが混じっていることに気づきました。
これは大発見でした。
ハリィは、空の向こうにも生き物がいるのかもしれないと言って、空に目を向け始めました。
空を見つめ、空について書かれた本を読み、空塗りの人たちに話を聞きました。
調査を続けるうち、ハリィはあることに気づきました。
それは、本来空にはひびなんて入るはずがないということでした。
空のもとはもともと、やわらかくてよく伸びます。歪んだり穴があくことはあっても、ひびが入ることは考えにくいことです。
ハリィは空のもとを焼いたり冷やしたり、水につけたりして、どうやったらひびが入るのか調べました。
ところが、どう頑張ってみても空のもとはやわらかいままで、ひびなど入りそうにありません。
どうしても空のひびの仕組みを知りたかったハリィは、空塗りの一人に飛び方を教わって、自分で空の向こう側を見に行くことにしました。
空塗りは止めようとしましたが、ハリィは聞きませんでした。
結局、空塗りが同行し、ハリィが行き過ぎたことをしないよう監視することになりました。
ハリィは鋭利なナイフを持って空へ向かい、空に大きく切り込みを入れました。

空はもともととても薄いので、これは造作もないことです。
ハリィは切り込みをちょっとめくり、そこから身を乗り出しました。
「なんてことだ！　向こうにも空が……それに……ああ、まずい……」
そばにいた空塗りが聞いたのはこんな言葉でした。
その後、静かになったハリィを不審に思って空塗りが引っ張ってみると、ハリィは身を乗り出した部分だけに火傷のような痕をつけて、死んでいました。
クリィのお母さんは、帰ってきたハリィの姿を見て泣きはらしました。

この謎の事故の後、ハリィの研究仲間は事故を気味悪がって研究をやめ、クリィのお母さんはハリィの知人と会うたびに事故を思い出すのでやり切れなくなって、適当な理由をつけて飛行船に乗ったのでした。
飛行船は空作りのまちに到着し、ここからは折り返すと言われたので、クリィのお母さんは飛行船を降りました。
「空作りのまちでは絶対に空にひびが入ったりしないって聞いてたし、このまちの人、誰も空のひびのことなんて知らなかったから、ここで一から始めようと思ったの。それでも一人は寂しいなって思ってたらあなたが生まれたのよ」
お母さんはそう言って、一度にいろんな話を聞かされて混乱しているクリィに笑いかけ、頭をなでました。
お母さんにとってはつらい思い出でしたが、ずっと隠していたことをクリィにようやく話すことができて安心していました。
お母さんの穏やかな表情を見て、クリィも安心しました。

「じゃあ、そのハリィっていう人が私のお父さんなの？」
「そうよ。子供が生まれたら二人の名前を合わせてクリィかハルトのどっちかにしようって、二人で決めてたの。クリィって、いい名前でしょ？」
クリィは、自分の名前にお父さんとお母さんの名前が入っているのだと知って、温かい気持ちになりました。
お母さんは、クリィの頭をなでながら、また話し始めました。
「あなたが飛行船に乗るって言ったとき、昔の自分を思い出してね。もう帰って来ないんじゃないかと思っちゃって。帰って来てほっとしてたら今度は空塗りをするって言うんだもの、ハリィを思い出しちゃって……」
クリィはお母さんの気持ちがよく分かりました。
それで、クリィはお母さんに抱きつきました。
お母さんは、微笑みながらクリィを抱きしめて、言いました。
「空塗りはやってもいいわ。クリィは空が大好きだもの。でも、危ないまねは絶対にしちゃだめよ」
次の日、クリィはソラじいさんに、ハリィという人のことを知っているか聞いてみました。
自分の父親だとは言いませんでした。
ソラじいさんは真面目な顔をして言いました。
「ああ、聞いたことがあるよ。空に穴をあけるなんて絶対にしてはならんことじゃ。わしらは空に穴をあけんために働いとるんじゃか

らのう。お嬢さん、空の向こうに何があるかなんて考えんことじゃ」

クリィは心の中で、自己暗示のように穴をあけちゃだめ、穴をあけちゃだめ……と繰り返しました。

空のてっぺん

空塗りになるための練習場所として、ソラじいさんは空作りの工場の中に一室を借りていて、空のもとも分けてもらっていました。

「工場のお部屋なんてよく借りられたね。私、中に入れてもらったのも初めてよ」

クリィが驚いて言うと、ソラじいさんはニカッと笑いました。

「当たり前じゃ！　わしがおらんかったら今の綺麗な空はないんじゃからな」

空作りのまちにソラじいさんが滞在していた三週間の間に、クリィはソラじいさんに負けないほどうまく飛べるようになりました。クリィのほうが元気なので、飛ぶ速度もソラじいさんの三倍ほどありました。

いまやクリィは、工場内だけでなくまちじゅうを飛んでいたので、他の子供たちが羨ましがりました。

ソラじいさんは、子供たちに自分にも飛び方を教えてくれとせがまれると毎回、

「わしより早く空のひびを見つけたら教えてやろう！」

と言っていました。

この効果で、まちの子供たちはみんな空ばかり見て過ごすようになりました。

ソラじいさんは、傷ひとつない空を必死に見回す子供たちを見て面白がりました。

ソラじいさんとクリィは、今度の飛行船に乗せてもらうことにしていました。
クリィにとってうれしいことに、お母さんも仕事を休んで一緒に行くと言いました。
お母さんは、クリィに隠すことがなくなった今、クリィと一緒に自分の故郷に行ってみたいような気になったのでした。

「お嬢さん。わしとあんたは途中で出るぞ。ひびが出そうな場所を通るからのう」

「おじいさん、ひびができる前から場所分かるの？」

ソラじいさんはにやっと笑って言いました。

「わしゃお嬢さんの何倍も空を見てきたからのう」

飛行船の男たちはみんなクリィたちを歓迎しました。
クリィは、前回の旅で乗組員みんなと仲良くなっていたので、飛行船の中を駆け回っていろんな人とおしゃべりしました。
ソラじいさんは、同じ空の仕事である乗組員たちの中では有名らしく、昔の空のことを話して聞かせていました。
クリィのお母さんは、おじさんに前回の旅と今回の旅のお礼を言い、クリィが一人でこの船に乗ったときの様子を聞いていました。

「ようエール！　愛しのクルトさんが乗ってくれてご機嫌じゃねえか！」

冗談交じりで楽しそうに話すおじさんに、冷やかしの声が上がりました。

おじさんは少し赤くなってバカヤローと罵りました。

「エールおじさんお母さんのこと好きなの？」

クリィが入ってきたのでおじさんの立場は苦しくなりました。
この頃には、クリィにとっておじさんと呼ぶべき人がたくさんいたので、それぞれ名前をつけて呼ぶようになっていました。

「まあ……ちょっとな」

「ちょっとだって？　俺は大好きですよー！　クルトさーん！」

からかい好きのボッグがクリィのお母さんに大げさに投げキッスしました。
エールは顔を赤くしながら、どうしていいかわからずまごついていました。
クリィがボッグに張り合って、

「私のほうが好きだもん！」

と言って両手で投げキッスしたので、みんな笑いました。
エールはクリィに助けられてほっとしましたが、クリィが自分を助けるために演技したのだと思って情けない気分になりました。

三日目には空集めのまちに着くのですが、ソラじいさんとクリィは到着の前に空のもとをまとって外に出ました。
ソラじいさんがクリィに空のてっぺんを見せてやるためです。
クリィは、無茶はしないようにとお母さんから何度も念を押されました。
三人は、後で空集めのまちで集合することにしていました。

集合場所は、クリィの提案で公園になりました。

飛行船から出ると、クリィは空気の冷たさに驚きました。
空のもとをまとっている体はなんともないのですが、顔には冷たい空気が容赦なくぶつかってきました。

「おじいさん！　顔が寒い！」

「顔は風下に向けるんじゃ！　少し上るぞ！」

二人はポンプを使って上って行きました。
クリィは風を受けないようにずっと同じ方向を向いていましたが、ソラじいさんは冷たい風に慣れているので、くるくる回って周りの空を確認していました。

「予想通りじゃ！　お嬢さん、ついておいで！　口の中に空のもとを準備しておくんじゃ！」

その向こうには

ソラじいさんの向かう先には、細長いひびがありました。
クリィは、ついていくために顔をソラじいさんのほうに向けねばならず、また顔に冷たい風を受けました。
地面が遠くて風もある、いつもとは全く違う環境にどぎまぎしながら、クリィはソラじいさんのほうを目指しました。
空作りのまちではクリィのほうが早く飛べましたが、この環境では経験のあるソラじいさんのほうが上でした。
クリィは風にあおられてふらふらしてしまい、うまく進めません。
それでも、口の中の空の草の効果で冷静さを保ち、何とかひびのところまでたどり着きました。

空のひびは、遠くで見ると小さくても、近くで見るとかなり大きく感じられます。
クリィは、指三本ほど入りそうな幅があるのに驚きました。
それでも、ひびは浅く、空に穴があいているわけではありませんでした。
クリィは、ソラじいさんが作業しているのとは反対側のひびの端に取り付き、ソラじいさんの作業を見よう見真似で、ひびを埋めていきました。

埋めるひびも残りわずかになって、クリィが空のもとと空の草を口に入れるのが五回目になるころ、クリィはひびの奥から小さな声を聞いたような気がしました。
空耳かと思って耳を近づけてみると、かすかですがやはり何かの声が聞こえるようです。
クリィは驚いてソラじいさんのほうを見ました。
ソラじいさんは、口の中から新しい空のかけらを出しながら、

「そいつが何かなんて考えるな！　今はとにかくひびを埋めるんじゃ！」

と叫びました。
クリィは、何も考えないように、穴をあけちゃだめ、穴をあけちゃだめ……と機械的に繰り返しながらひびを埋めました。
ひびのあった場所が埋められて分からなくなると、ソラじいさんは少し離れて出来映えを確認しました。

「初めてにしては上出来じゃ！」

ソラじいさんは褒めてくれましたが、クリィが見ると、自分の埋めたところだけ色がまちまちなのでちょっと残念でした。

二人は、気流に乗って空集めのまちを目指しました。
ソラじいさんは風に乗る名人でしたが、クリィも少しずつ慣れて余裕を持ってついていけるようになりました。
クリィは、ソラじいさんの後ろで、さっき聞こえた声について考えました。
ひびの向こうからだったので人の声か動物の声かも分かりませんでしたが、確かに何かの声を聞いたのです。
クリィは、その何かが空の内側に入ろうとしているのだと思いました。
でも、外側に何がいるのか、クリィには皆目見当がつきませんでした。
お父さんが火傷して死んだと言う話を思い出し、何か怖い生き物かもしれないと思いました。

クリィはまちに降り立つとすぐに歯を磨きました。

ソラじいさんは、長年の空塗り作業で口の中が青を通り越して真っ黒だったので、何も気にかけませんでした。
ソラじいさんは、念入りに歯を磨くクリィを見て、

「こりゃあ空塗りより先に歯磨きの名人になるわい」

と言っていました。
クリィは口の中の青を綺麗に落とすと、さっきの声のことをソラじいさんに尋ねました。

「ふむ。少しは知っておいてもいいかもしれんのう」

クリィは、公園までの道すがら、ソラじいさんからさっきの声の主のことを聞きました。

ソラじいさんによれば、あの声はネズミの声でした。
空作りに空の草を使う前、つまり、適当な草や生ごみで空を作っていた頃は、今までよりもひびができることが多く、ときどきは小さい穴があいてしまうこともありました。
穴があくと、決まってそこから小さなネズミが出てくるのでした。
このネズミは、繁殖力が強く、いろんな作物を食い荒らすので、地上で発見されるとすぐに駆除されました。
空塗りたちは、穴が開きそうな場所を見つけると、ネズミが嫌う草などを空のもとに混ぜて、それでひびを埋めました。
ネズミよけとしていろいろなものが使われましたが、最も効果があったのがソラじいさんの使った空の草でした。
空の草は人間にとっては薬になりますが、体の小さなネズミにとっては強い毒です。
空の草を使って空塗りをしたところは、もう一度ネズミに破られることは絶対になく、鮮やかな青が綺麗なので好評でした。

次にソラじいさんは、空の草を増やして、最初からそれを混ぜて空作りをすることを提案しました。
この案はすぐに実行に移され、美しくひびの入らない、新しい空ができたのです。

変わりゆくもの

公園が見えてきたので、ソラじいさんは話を止めました。最後にこう付け加えました。

「この話は誰にもしてはいかんぞ。空塗りだけの秘密じゃ」

クリィは、ソラじいさんにまた今度聞かせてくれるよう頼むと、走って公園に向かいました。
公園では、クリィのお母さんが木に身を寄せて待っていました。
走ってくるクリィを見つけると、お母さんは笑顔で迎えました。

「クリィ！　空はどうだった？　なんともなかった？」

お母さんは、小さな子供をいたわるように尋ねました。
上空を飛ぶ飛行船から飛び出すなど、お母さんの目には自殺行為のように映っていたのです。
クリィは自分が空のひびを埋めたことを得意になって話しました。
お母さんは、クリィが立派に仕事をしていると知って、うれしくもあり、寂しくもありました。
クリィがまた一歩自分から離れていくように感じられたからです。

クリィは公園で例の子供たちにも会えるかと期待していたのですが、もう暗くなり始めていて公園にはクリィたちのほかに影ひとつありませんでした。
三人は公園からすぐ宿を目指しました。
道すがら、ソラじいさんが自分たちが直したひびのところを見つけ、二人に教えました。
その部分は、もうまもなく空集めの工場に入るであろう低い位置に

ありました。
クリィは、遠くから見ても自分の埋めた部分の色がちぐはぐなので恥ずかしく思いました。
クリィのお母さんは、確かにクリィが直したのだと実感して誇らしく感じました。

クリィのお母さんは、二人が空に出ている間に昔の知り合いを訪ねていました。
半数は温かく迎えてくれ、半数は引っ越した後などで会えませんでした。

「おじいちゃんとおばあちゃんにも会ったの？」

クリィがわくわくして聞くと、お母さんは首を横に振りました。

「だめだったわ。ずいぶん前に引っ越しちゃったみたいなの」

クリィは残念がりました。
お母さんは、顔には出しませんでしたがクリィ以上に残念がっていました。
どうしてもっと早く帰って来なかったのだろうと考えていました。

宿では、酔っ払った飛行船の男たちが、もう一度「愛しのクルトさん」をやってエールをからかっていました。
クリィはネズミの話が気になっていましたが、ソラじいさんが寝ると言って自分の部屋に入ってしまったので聞けませんでした。
クリィも自分の部屋に入って、ネズミたちのことを考えました。
ソラじいさんの話では、ネズミたちは空の草が食べられず、空のひびは何十年も前になくなったのでした。
それが、最近になって突然、また現れたのです。

それに、クリィには不思議でならないことがありました。
もしネズミたちの仕業で空のひびができるのなら、ひびは空の外側にできるはずです。
クリィはその夜、ベッドの中でもいろいろ考えましたが、結局何も分からなくて寝てしまいました。

クリィのお母さんにとっては残念なことに、次の日にはもう空集めのまちを発たねばなりませんでした。
その日出発しなければ一週間後の飛行船を待たなければなりません。
そんなに長く仕事を休むわけにはいきませんし、物価の高い空集めのまちに一週間滞在するだけのお金も持っていませんでした。
それでも、飛行船の男たちは気を利かせて、出発をお昼まで待ってくれると言いました。

クリィがお母さんの思い出の場所を見たいとせがむので、二人はまちの中をあちらこちら歩き回りました。
クリィは、お母さんが楽しそうに子供の頃の話をするので、自分も楽しい気分になりました。
お母さんは何気ないものにも思い出を見出し、無邪気にクリィに話しました。

その頃ソラじいさんは、昔の空塗り仲間に会いに、空集めの工場に赴いていました。
空集めの工場には、すぐ近くに研究施設が付属していました。
ソラじいさんの仲間はここで所長をしていました。
研究所は厳重に警備されていて、関係者以外は入れませんでしたが、この人物はソラじいさんが来たと知ると自分から出迎えました。

「ワット！　久しぶりじゃないか！　一体どうしたんだい、こんなところまで？」

「久しぶりじゃのう、カル。　ちょっとお前に相談があってね……」

ソラじいさんはこの所長の部屋に通されました。
大きな肘掛け椅子やソファのある部屋でした。

「最近また空にひびが入っておる」

ソラじいさんが話し始めました。

「最初は偶然かとも思ったがどうも違うらしい。空作りのまちの工場に行って聞いてみたが空の作り方は昔から一切変えておらんと言っておった。あのネズミどもが空の草を食べるようになったとしか考えられん」

「そのようだね」

「どうする？　放っておくわけにもいかんじゃろう」

「率直に言って、どうしようもないと思う」

「空の草以外の、何かやつらを防げるもので空を作ることはできんのか？」

「たぶん無理だ」

ソラじいさんは、カルが簡単に否定的な意見ばかり述べるのでイライラしました。

「無理だのどうしようもないだの言う前に、何かやってみたらどう

じゃ！」

「やってるとも。実は先日、空に意図的に穴をあけて、何匹かネズミを捕ってきたんだ。やつらは何でも食べるし、ものすごい勢いで繁殖する。はっきり言って悪夢だ」

「空に穴をあけたじゃと？　お前そんなことまでしとるのか！」

「仕方ないだろう。相手のことが分からなければ手を出せない。ワット、お前が空の草を見つけたときほど簡単にはいかないさ。あの時は幸運だったんだ」

ソラじいさんは言い返してやろうと思いましたが、その言葉が見つからず、口をもごもごと動かしました。

「見てみるかい？　我らの敵を」

空の色、人の色

ネズミたちは、壁の高いガラスのケースに入れられていました。このネズミたちは、ちょっと見ている間にもかなりの量を食べ、動き回り、子を生んでいました。
これが野生になれば自然界を食べつくしてしまうのは明らかでした。

「空に穴をあけようとする本能なんだろうが、空の草を見つけると真っ先に食べようとする。寿命は一週間もないが、その間一睡もしない。そして何より驚きなのは、このネズミは死ぬとどろどろに溶けるんだ」

カルはこのネズミについて分かっていることをソラじいさんに説明しました。
これらの不思議な性質は、空の上という過酷な環境のために発生したものだとカルは考えていました。
死ぬと溶けるという非常識な話を初めソラじいさんは信じませんでしたが、じきに目の前でそれが起こりました。
元気に走り回っていたネズミが突然動きを止め、倒れたかと思うと、数秒後には溶け始め、すぐに明るいオレンジ色の液体になったのです。
ソラじいさんが呆気にとられていると、カルが説明を加えました。

「こいつらは、成長が早い分、体の割りに多くのエネルギーを必要とするんだ。効率よくエネルギーをとるために、消化機構が相当発達しているんだと思う。死ぬと内臓の粘膜が止まるから、強力な消化液が体ごと溶かしてしまうんだろう」

言い終わるとカルは、部下に命じてこの液体を取り出そうとしまし

た。
ソラじいさんは、これを静止するしぐさをして、黙って観察を続けました。

飛行船の出発時刻が近づいていました。
クリィたち二人はまちを一周して発着場に戻り、飛行船に乗り込んでいました。
クリィのお母さんは、午前中ずっと歩き回って思い出話をしていたので、幸福な疲労感に浸っていました。
クリィは、いまや半ば自分のもののように感じられるこのまちの風景を惜別の念を持って眺めました。
最初はつまらないと思っていた白っぽい空も、これはこれで良いものだと思いました。

「あっ！　お母さん、あれ！」

お母さんはクリィの指差す方向を見ましたが、ただ空があるだけでした。

「またひびができてる！　おじいさんに教えてあげなきゃ！」

お母さんはうろたえました。
もともとこの飛行船には乗らないと言っていたソラじいさんに会うには、またまちに出て探さねばなりません。
今出れば、飛行船の出発に間に合うはずがありません。

「行ってもいい？　来週の飛行船で帰るから！」

お母さんは観念して小さくため息をつくと、笑顔を作って言いました。

「行ってらっしゃい。気をつけてね」

まもなく出発した飛行船の中で、クルトはクリィが自分の手を離れたのを感じていました。
空作りのまちに引っ越してから、家族はクリィただ一人でした。
クルトはクリィのために働きました。
だからこそ、クルトを支えたのはクリィでした。
いずれ、クリィが家を離れるときが来るでしょう。
そうなったら、一人で生きていける自信がありませんでした。

頬杖をついてぼうっとしているクルトの目の前に、鮮やかな青色の花が一輪現れました。
見ると、エールが伺うような目をしてそれを差し出していました。
エールは、クリィにやったのと同じように空のもとと空の草を混ぜ、器用に花の形に仕立てたのでした。
クルトは微笑んでそれを受け取ると、

「あの時と同じね」

と言いました。
縁(よすが)を失ったクルトには、自分を想ってくれる存在がとても大きく感じられました。

一週間後、クリィとソラじいさんは飛行船の中にいました。
二人は思い思いに橙色の空を眺めていました。
空のひびはもうどこにもありませんでした。
ソラじいさんは、人間が平和に暮らしているこの世界のことを考えていました。
外にいるネズミたちを疎外しながら、自分たちはそのネズミの亡骸(なきがら)

を肥料としてのうのうと暮らしているこの世界。
ソラじいさんは、空の美しい橙色がネズミの体液でできているとは誰にも知らせたくありませんでした。
そう、ネズミたちは仲間を食べることはなかったのです。
その性質を使ってネズミの被害を防ぐのは、ソラじいさんにはほとんど罪悪のように想われました。
でも、こうするより他になかったのでした。
いつか、ネズミたちはこれを克服してまた人間たちを悩ませるでしょう。
ソラじいさんは、ネズミたちにはその資格があると想いました。
それ以上に人間はネズミを悩ませているからです。

ソラじいさんは、クリィにはまだこのことを話していませんでした。
空作りの工場、空集めの工場の関係者しか、空の材料のことを知りませんでした。
クリィにはこのことを知る権利があると、ソラじいさんは思いました。
でも、いつ、どうやってそれを話していいものか分かりませんでした。
これは正義の話ではなく、ずる賢いニンゲンの話でした。

クリィは、空を眺めながら、ぽつんと、
「おじいさん、この空も綺麗だね」
と言いました。

空の色、人の色（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございました。
小説を書いたのは初めてです。
自分が作った設定に縛られて、最後はちぐはぐな展開しか書けませんでした。
回収できてない伏線もちらほらありますが、ご了承ください。
ご意見、ご感想など書いて下さると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7706n/

空作りのまち

2010年10月9日12時46分発行